

Ernest Hemingwayの作品における無意識の描かれ方：

「キリマンジャロの雪」と『老人と海』の場合

Descriptions of Unconsciousness in Ernest Hemingway's Stories: A Study of "The Snows of Kilimanjaro" and *The Old Man and the Sea*

佐々木 周 子

Introduction

本稿では、Ernest Hemingwayの名作とされる二作品、“The Snows of Kilimanjaro”と*The Old Man and the Sea*の成功を考える上で、夢や回想といった無意識の状態が共通して描写されていることに着目する。作品に無意識の状態を取り入れることによっていかに主人公の描き方が充実し、作品の構成がより高度になっているかを検討していく。

“The Snows of Kilimanjaro”と*The Old Man and the Sea*はHemingway自身が手ごたえを感じた作品であるだけでなく、批評家からの評価も高い。「Hemingwayはよく“The Snows of Kilimanjaro”を彼の好きな短編小説として言及し」(Bloom, “Plot Summary of ‘The Snows of Kilimanjaro’” 69)、*The Old Man and the Sea*について、「『まるで私が生涯取り組んできたものをついに手に入れたようだ』とHemingwayは書いた」という事実にあるように、両作品ともにHemingwayが自信を持っていた作品である (Waldhorn 196)。批評家たちも、例えばJames Mellowは“The Snows of Kilimanjaro”を「疑いなく彼 [Hemingway] の短編小説の中で偉大な名作」とし (Moddelmog 119)、Arthur Waldhornは「HemingwayがHarryの苦しめられた精神の境界の中を探るために、“The Snows”は実に見事な小説であり、間違いなく彼の最高傑作の一つである」と主人公Harryの心理描写の点から評価する (146)。またHarold Bloomは、“The Snows of Kilimanjaro”を「すべての芸術家が理想主義と世界の誘惑の間、つまり言葉で世界を創造する孤独な仕事と肉体の怠惰な喜びの間で直面する葛藤の話である」と分析する (“Plot Summary of ‘The Snows of Kilimanjaro’” 69)。Bloomは、「心理学的な動機づけや内部の葛藤における実験として、“Snows”はHemingwayの最大の勝利の一つである」と“The Snows of Kilimanjaro”の成功の理由を分析する (“Plot Summary of ‘The Snows of Kilimanjaro’” 69)。Leo Gurkoは*The Old Man and the Sea*について、Hemingwayの他の作品とは異なる肯定的な作風を次のように評価し、*The Old Man and the Sea*に描かれた人間の可能性を指摘している。

Hemingwayの小説の大部分は、人間ができないことを強調し、世界の限界、残酷さ、生来の悪を定義する。*The Old Man and the Sea*は人間ができることと、英雄的な行為が可能な場としての世界の強調のために注目に値する。年老いたキューバ人の漁師であるSantiagoが住んでいる世界は悲劇や苦痛から自由ではないが、これらは超越され、その肯定的な調子は*The Sun Also Rises*と*A Farewell to Arms*のような悲観主義が広がる本とは鋭い対比が認められる。(13)

Hemingwayが主人公の無意識の状態を描写したことによって、優れた人物表現が生み出されたと考える。主人公の無意識の状態の中に彼らの心理状態が露呈されており、複雑な心理描写がなされている。意識を離れたところにある一見無意味と思われる無意識の中に、主人公の真意がどのように現れ、それが作品をいかに優れたものにしているかを検討したい。次に無意識が場面の変換に用いられ、無意識の描写が時間・空間的に作品に広がりをもたらしており、作品に時空世界が形成されていることを考察する。主人公の夢うつつの無意識の状態と現実が対比をなしていたり、それらが交互に現れ、入り混じることにより、次第に意識を失っていく主人公の葛藤や、未練・後悔が感じられる。

本稿では、上記二作品において、夢や回想が、過去と現在および理想と現実の変換や、場面の移動に効果的に用いられている点にも着目する。Harryが眠りに落ちたり回想にふける際に過去の出来事の回想が描写される。過去の回想は小説の題材になり得る輝かしいものであるが、Harryが我に返ると、場面は現実のアフリカで、Harryは怪我をした状態で横たわっている。一方Santiagoは現実の苦しい漁の最中、ライオンの夢を見たり、若い頃腕相撲で勝利した過去の栄光を思い出して力に換える。

さらに、無意識の視点から二作品をとらえ直すことは、Hemingwayの描くヒーロー像の解明にもつながるだろう。両作品の主人公には共通点がある。“The Snows of Kilimanjaro”の主人公は作家であるが、温めてきた題材を書かずに怠惰におぼれ、書く能力を失っている上、右足の壊疽により死を目の前にしている。*The Old Man and the Sea*の主人公は漁師であるが、年をとり、運にも見放され、漁の最中、手を怪我したり、左手が攣るため力を発揮できないというハンディキャップを負っている。84日間にわたる不漁の後ようやくマカジキを釣ったものの、鯨との死闘の末マカジキは鯨に食べられてしまい、Santiagoは骨となったマカジキとともに帰還する。このように、両作品ともに本来の能力を発揮できず、死に直面する主人公が描かれる。

二つの作品には主人公の死を感じさせる場面も存在する。“The Snows of Kilimanjaro”では死を意識した主人公がどのように死の恐怖に立ち向かい、残された使命を認識、全うさせ、自分の人生に折り合いをつけて自らの最期の生を燃焼させるのかを、*The Old Man and the Sea*では、主人公はサメとの死闘の中で、死を強く意識した際に人間はどう生きるのかというテーマや人間の尊厳が描かれている。

“The Snows of Kilimanjaro”と*The Old Man and the Sea*を無意識の視点から読み直し、Hemingwayが両作品で主人公の無意識の状態を描写したことにより、意識下では現れない人間の苦悩や葛藤といった複雑な心理状態の表現に成功していること、意識・無意識の切り替えによって作品の空間的な構成がなされていること、およびHemingwayが描いた二人の主人公の共

Ernest Hemingwayの作品における無意識の描かれ方：『キリマンジャロの雪』と『老人と海』の場合
通性、主人公の無意識の状態を描き分ける際の技法の特徴について解明していく。

1. 無意識の中に現れる真意

本章では、無意識が作品に与える成功例の一つとして、Hemingwayによる主人公の無意識の描写を分析し、主人公の夢や回想という無意識の状態に現れる主人公の真意を読み取っていく。現実では強がりを見せる主人公であるが、夢や回想の中では日常的に隠れている内面が露呈されていることに着目する。

“The Snows of Kilimanjaro”において、Harryが後悔していることは夢や回想の中に読み取れる。Harryは妻のHelenに対して強硬な態度を取り、弱みを見せないが、夢の中で彼は後悔し、自分の思いを露呈する。

現実ではHarryはHelenに次のような言葉を吐く。Helenが「本を読んであげましょうか？」と声を掛けるが、HarryはHelenの申し出をその度に拒否し受け入れない。さらにHarryの身体を心配してHelenがアルコールは身体に良くないので控えるように言っても、Harryは従わずに半ば自暴自棄のようにウイスキーソーダを注文してしまう。Helenはアフリカへ来たことを後悔するが、HarryはHelenのろくでもないお金を使ってハンガリーで狩猟を楽しめたと言い返し、Helenに強気な態度を示す。さらに、HelenはHarryを愛していると言い、彼に自分を愛していないか尋ねると、Harryは非情にも愛していないと答えてしまう。

以下はHarryがHelenに強気な態度を取る場面である。

Helen: “...Couldn't I read to you?”

Harry: “I can't listen to it,”.... “Talking is the easiest. We quarrel and that makes the time pass.”

Helen: “Wouldn't you like me to read?”

Harry: “No thanks.” (“TSK” 53)

Helen: “It[A drink]'s supposed to be bad for you. It said in Black's to avoid all alcohol. You shouldn't drink.”.... “You shouldn't,”.... “That's what I mean by giving up. It says it's bad for you. I know it's bad for you.”

Harry: “No,”.... “It's good for me.”

Helen: “I wish we'd never come,”.... “You never would have gotten anything like this in Paris.... If you wanted to shoot we could have gone shooting in Hungary and been comfortable.”

Harry: “Your bloody money,”.... (“TSK” 54)

Helen: “...I love you now. I'll always love you. Don't you love me?”

Harry: “No,”.... “I don't think so. I never have.” (“TSK” 55)

しかし、Harryの心情は実際にHelenに見せる強硬な態度とは異なり、彼女の自分への気遣いも感じ取っているのである。以下のように、Harryは心の中では客観的に彼女の心配りや行動を分析し、Helenを評価している。

She had gone to kill a piece of meat and, knowing how he liked to watch the game, she had gone well away so she would not disturb this little pocket of the plain that he could see. She was always thoughtful, he thought. On anything she knew about, or had read, or that she had ever heard. (“TSK” 59)

しかし、そのことは彼の口からHelenには伝えられない。彼の暴言は意味があるわけではなく、Helenに非がないことを彼自身認めている。

It was not her fault that when he went to her he was already over. How could a woman know that you meant nothing that you said; that you spoke only from habit and to be comfortable? (“TSK” 59)

死を悟ったHarryは、Helenに対して自暴自棄と思えるような痛烈な行動を見せる。彼はHelenを傷付けることが楽しいとまで言い、Helenに““All right then. I'll go on hurting you. It's more amusing....”” (“TSK” 58) と精神的苦痛を与える。

現実ではHarryはHelenに嘘をつく。

“Do you think that it is fun to do this? I don't know why I'm doing it. It's trying to kill to keep yourself alive, I imagine. I was all right when we started talking. I didn't mean to start this, and now I'm crazy as a coot and being as cruel to you as I can be. Don't pay any attention, darling, to what I say. I love you, really. You know I love you. I've never loved any one else the way I love you.”

He slipped into the familiar lie he made his bread and butter by. (“TSK” 58)

しかし、この甘いセリフの直後に““You bitch,”.... “You rich bitch. That's poetry. I'm full of poetry now. Rot and poetry. Rotten poetry.”” (“TSK” 58) とHelenをののしる。

ただし、意地悪いセリフの中にも“poetry”と繰り返されるように、Harryが作家であり、書けなかった作品への未練とも解釈できる文学に関する言葉が用いられている。このように、Harryは強がってはいるものの自分が作品を完成できなかったことへの後悔や苛立ちが見てとれ、作家としての仕事に対する未練にとりつかれている様子が窺える。

自分が書けなかった作品に対するHarryの態度もHelenに示す態度と類似している。現実ではHarryは自分が書けなかったことを気にかけない振る舞い、強気な姿勢を見せる。し

Ernest Hemingwayの作品における無意識の描かれ方：「キリマンジャロの雪」と『老人と海』の場合
かし、実際には彼は作家としての仕事ができなかったことに苦しんでいる。Harryの以下の回想からは、Harryの作家としての野望が感じられる。

But, in yourself, you said that you would write about these people; about the very rich; that you were really not of them but a spy in their country; that you would leave it and write of it and for once it would be written by some one who knew what he was writing of. (“TSK” 59)

現実の彼は野望を実現することには努めず、墮落し、筆力も衰え、作品を書けずに終わる。

Harryは心の中ではHelenのせいにするのではなく、自分の能力の低下を認めている。Harryは
“Now he would never write the thing that he had saved to write until he knew enough to write them well.” (“TSK” 54) とあるように、自分自身がなかなか作品を書けないことを自覚している。

また次の記述からはHarryの作家としての能力の限界が読み取れる。

Well, he would not have to fail at trying to write them either. Maybe you could never write them, and that was why you put them off and delayed the starting. Well he would never know, now. (“TSK” 54)

さらにHarryは自分の墮落はHelenによるものではなく、自分自身にあると認めている。

He had destroyed his talent himself. Why should he blame this woman because she kept him well? He had destroyed his talent by not using it, by betrayals of himself and what he believed in, by drinking so much that he blunted the edge of his perceptions, by laziness, by sloth, and by snobbery, by pride and by prejudice, by hook and by crook. (“TSK” 60)

イタリック体で表記された空想の中では“*he had never written*”が繰り返され、書けなかったことへの執着と苦しみが読みとれる (“TSK” 56-57)。

He remembered the good times with them all, and the quarrels. They always picked the finest places to have the quarrels.... He had never written any of that because, at first, he never wanted to hurt any one and then it seemed as though there was enough to write without it. But he had always thought that he would write it finally. There was so much to write.... He had been in it and he had watched it and it was his duty to write of it; but now he never would. (“TSK” 66)

体調が悪化したHarryは幻想と現実認識が入り混じるようになり、“It’s a bore,”.... “I’ve been writing,””とHelenには意味不明なことを唐突に言うようになる (“TSK” 73-74)。無意識下での

幻想と意識下での現実の描写が、次第に昏睡状態に陥っていくHarryの容体と重なり、余命少ないHarryの生への未練を示唆すると考えられる。

次に、*The Old Man and the Sea*の主人公Santiagoの空想、夢、無意識に発せられた言葉を分析していく。“It was considered a virtue not to talk unnecessarily at sea and the old man had always considered it so and respected it.” (TOMS 27) とあるように海上ではむだ口をきかないことが美德とされ、Santiagoはその徳を守ってきたが、Manolinが去って一人で漁に出るようになってからは、孤独から大声で独り言を言うようになった。

一人では手に負えない大きさのマカジキがかかると、「あの子がいたらなあ」と大声で本心を言い、「あの子がいたら手伝ってもらえるし、見張りもしてもらえるのに。」と、自らの年齢と孤独を痛感する。

しかし、しばらくするとManolinがいない現実を受け止め、冷静かつ前向きに、一人でできるマカジキへの具体的な対策を次のように考える。

But you haven't got the boy, You have only yourself and you had better work back to the last line now, in the dark or not in the dark, and cut it away and hook up the two reserve coils. (TOMS 37-38)

また、Santiagoは海を見渡してさらに孤独を感じるものの、“He looked across the sea and knew how alone he was now.... no man was ever alone on the sea.” (TOMS 45) と海の上に孤独はないと思い直す。

他にも、左手がひきつったSantiagoは、あの子がいれば揉みほぐしてくれると考えるが、ほぐれてくるだろうと思い直す。

“I wish he'd sleep and I could sleep and dream about the lions...” (TOMS 49) という思いからは、Santiagoが元気が出るモチーフとしてライオンの夢を見たいと思っている様が窺える。

Clinton S. Burhans Jr.が、*The Old Man and the Sea*における人間の連帯と相互依存のテーマを指摘し、「人間の連帯と相互依存のこのテーマはいくつかのシンボルによって補強される」とし、野球、Joe DiMaggio、ライオンを挙げ (49)、「Santiagoが夢見るライオンおよび彼がキリストのシンボルの点としてそれらを描写していることは、孤立した個人主義や誇りとは対照的な、連帯、愛、そして謙遜を示唆する。」と述べているとおりである (Burhans 50)。

Santiagoはマカジキとの闘いの中で、かつてつがいのマカジキのメスを釣り上げたことを思い出す。この記憶は、Santiagoにとり最も悲しいこととされるが、この回想場面であの子も悲しそうだった (TOMS 36) とManolinのことが思い出されている。

Ernest Hemingwayの作品における無意識の描かれ方：「キリマンジャロの雪」と『老人と海』の場合
Santiagoは漁に出る前に少年だった頃のアフリカと砂浜のライオンの夢を見る。

He was asleep in a short time and he dreamed of Africa when he was a boy.... He only dreamed of places now and of the lions on the beach. They played like young cats in the dusk and he loved them as he loved the boy. (*TOMS* 15–16)

目が覚めると、Santiagoは「今日は自信がある。」(*TOMS* 17) とManolinに言って漁に出るが、マカジキとの闘いで意識を失いそうになる中、昔の誇りを思い出して力を出し、闘い続ける。

He took all his pain and what was left of his strength and his long-gone pride and he put it against the fish's agony.... (*TOMS* 71–72)

サメに食べられて骨となったマカジキと帰還した後も彼はライオンの夢を見る。*The Old Man and the Sea*においてもSantiagoの夢うつつの状態と現実が交錯するが、場面の転換は読者が違和感を覚えることなく自然に行われ、ここにHemingwayの構成力の巧みさを見ることができる。

以上のように、主人公の無意識の状態を描くことが心理描写に深みを与えている事実を指摘できる。主人公の空想や、思わず発せられた言葉の中に、また無意識として描写される中に、主人公の葛藤や苦悩が描かれ、複雑な感情表現が生み出されている。Harryの場合は妻のHelenへの感謝や書けなかった作品への執着、Santiagoの場合は今小舟の中にいないManolinとの絆である。さらに、Manolinへの絆は、Santiagoが無意識に見るライオンのシンボルによって補強されることになる。また、Santiagoが闘う力や自信を得るアフリカのライオンは、彼が無意識に見る夢の中に現れていることから、作品の成功にHemingwayの無意識の描写が果たす意義は大きいと言えるだろう。

II. 無意識による変換

第二章では、Hemingwayによる作品の構成上の成功例として、“The Snows of Kilimanjaro”と*The Old Man and the Sea*に共通して描かれる夢や回想という無意識が場面の変換に使われていることを考察する。

二作品において、夢や回想は理想としての過去と現実である現在の変換を果たしている。Harryの回想、Santiagoの夢、どちらにおいても過去の栄光が思い出されている。Harryの場合は脚の壊疽により、Santiagoの場合はマカジキやサメとの闘いによって死に直面しているが、回想場面では、過去の良いことが多く思い起こされる。Harryの回想は小説の題材にもなる輝かしい彼自身の過去であり、致命傷を負っている現実とは対照的である。一方Santiagoは「かつてカサブランカで、腕相撲でシェンフェゴス出身の巨大な黒人を打ち負かし、それ以来*El Campéon*と呼ばれた」ことをマカジキとの闘いの中で回想する (Gurko 16)。“As the sun set he

remembered, to give himself more confidence,...” (TOMS 51) とあるように過去の栄光を思い出すことにより、力を得る。

さらに、作家であるHarryは、自分がいつか作品に書こうとしながらも書けなかった素材を回想する。Harryは、カラガッチの鉄道の駅を思い浮かべるが、軍の撤退の後、トラキアを離れようとしたのであり、この実体験はいずれ作品に書こうとあためていた題材の一つであった。

この書けずにいる過去についての回想では、作品の題名につながる雪についての記憶が多く思い出される。朝食の際、窓の外を見ると、ブルガリアの山々が雪をかぶっていたこと、ナンセンが住民たちを雪の中に送り込み、死なせたこと、ガウアータールでクリスマスの週に雪が連日降り続けたこと、シュルンツでのクリスマスの日にHarryがスキーで大滑降をしたこと、猛吹雪でマドレーナーハウスで一週間カードをして過ごしたこと、である。Harryの以下の回想にあるように、Harryの人生でギャンブルに費やした日々も、雪が降るか降らないか雪への関心が持たれていたことが分かるのである。

When there was no snow you gambled and when there was too much you gambled. He thought of all the time in his life he had spent gambling. (“TSK” 56)

雪には純潔や、溶けて消えてしまうはかないイメージがある。Harryが記憶する雪に関するエピソードは、Harryが作品にすることなく亡くなるために、雪と同様にHarryの死とともに消えてしまう。彼はHelenに口述筆記を頼むが、それも無理であり、Harryはエピソードを形に残すことができない。Bloomはこの点について、「自らの芸術に忠実であり、かつ自らの記憶を文章につぎ込むために、彼は最後の努力をしてHelenに口述筆記を頼む。しかし、彼女は口述筆記を学んだことがなく、彼は記憶と共に取り残される。」と説明している (“Plot Summary of ‘The Snows of Kilimanjaro’” 70)。またScott MacDonaldは「Harryの経験にフィクションの素材として潜在的価値があることと、この潜在能力を主人公が利用できないことを作者が強調することによって、少なくともある意味では主人公の記憶のいくつかはフィクションの素材になったという事実が際立つ」と考察する (84)。

このように、小説の素材になり得たHarryの回想場面と、作品にできずに人生を終えることになる彼の現実の対比が浮き彫りにされる。また、形にならないまま回想場面が消え去ってしまう状況は雪のイメージで語られていることに気付く。

“The Snows of Kilimanjaro”と*The Old Man and the Sea*は、共に主人公の人間描写が高く評価されている。Bloomは、「Harryは世界の贅沢によってだめになった芸術家、彼の腐敗した脚が肉体的に死んでいるように精神的に死んでいる、生きている人間の完璧なイメージである」と主張し (“List of Characters in ‘The Snows of Kilimanjaro’” 73)、GurkoはHemingwayのヒーロー像としてのSantiagoを以下のように指摘する。

永久的に傷付いたり、幻滅を感じているのではないHemingwayの唯一の主人公であるので、実際Santiagoはヒーローの最も明確な表現である。彼の英雄的な面は至る所で示される。かつてカサブランカで、腕相撲でシェンフェゴス出身の巨大な黒人を打ち負かし、それ以来EI

Ernest Hemingwayの作品における無意識の描かれ方：「キリマンジャロの雪」と『老人と海』の場合
*Campéon*と呼ばれた。今、年をとって、彼は彼といつも漁をしたがり、できないと少なくとも彼の最もつまらない雑用でさえ彼を手伝いたがるManolinによって英雄崇拜される。(16)

Joseph Waldmeirは、「老人は漁師で、教師でもあり、漁の仕方一つまり、生計の立て方一だけでなく、その上ふるまい方を少年に教え、彼に良い生活に必要な誇りと謙遜を与えてきた人である。」とManolinに対するSantiagoの役割と指導力を解説する(28)。Santiagoは漁の最中、野球選手のJoe DiMaggioのことを考えたり、アフリカの砂浜のライオンの夢を見て元気を出す。Gurkoが、「野球選手の王と動物の王の継続的な関連によって老人の英雄的な部分が増す」と指摘するように、空想や回想の場面が主人公Santiagoの英雄的イメージを強化していることが明らかである(16)。

また、回想と現実において過去と現在という時系列の移動だけでなく、場所の移動も行われ、作品の空間的なスケールを広げている。Carlos Bakerが「彼の心はパリでのかつての生活の頃に遠く離れていて、今、アフリカへ戻ってきた」と指摘するように、回想と現実の間でHarryの心は時系列上と地理上で移動している(194)。パリはHarryの好きな都市であり、過去の健康だったときにHelenとともに訪れている。Helenの“...You always said you loved Paris....” (“TSK” 54)という言葉にもHarryがパリを好んでいたことが示唆される。

軍の撤退の後、トラキアを離れようとしていたこと、雪に関する記憶、列車の爆撃、オーストリア人との記憶などの回想から我に返ると、場面は現実のアフリカで、HarryはHelenに過去にパリで泊まったホテルについて尋ねる。Helenは““At the Crillon. You know that.”... “There and at the Pavillion Henri-Quatre in St. Germain. You said you loved it there.”” (“TSK” 57) と答え、パリを過去のこととして語る。

Harryが眠りから我に返るとき、アフリカの現実世界が細かく描写される。

The sun was gone behind the hill and there was a shadow all across the plain and the small animals were feeding close to camp; quick dropping heads and switching tails, he watched them keeping well out away from the bush now. The birds no longer waited on the ground. They were all perched heavily in a tree. There were many more of them. (“TSK” 58-59)

現実世界では陽が沈み、平原が影に覆われ、不気味な挙動の動物や鳥が描かれ、さらに鳥の数も増えて、Harryの脚の回復が見込めないことが窺える。

また、現実のアフリカでのHarryの脚の手当てやめまいの場面から、パリでの喧嘩、コンスタンティノーブルで女と過ごしたこと、結婚生活が破綻した状況へと場面が移る。そして回想の後、現実のアフリカでHelenが““How do you feel?””とHarryの具合を尋ねるのである (“TSK” 66)。

*The Old Man and the Sea*においても、「夜、彼が眠ると、彼はアフリカの砂浜で遊ぶライオンの夢を見る」場面があり、現在Santiagoが小舟でいるメキシコ湾流から過去のアフリカへと場所が移る (Gurko 16)。このように二作品には、過去の回想の舞台である場所と現実の場所との

移動が見られる。

このように、“The Snows of Kilimanjaro”と*The Old Man and the Sea*に共通して、夢や回想という無意識の状態が、時間や場面の変換・時系列上と地理的な距離の移動において用いられ、作品の時空上のスケールを広げている。さらに、過去の栄光が無意識に思い出されることから、無意識の場面が主人公の英雄的イメージをも向上させていると考えられる。

III. 二作品に見られるHemingwayの表現技法

本章では、Hemingwayが主人公の内面の描写に加えて、読者が主人公の状況を感じ取れる仕掛けや表記上の区別を作品の中に配していることに着目する。まず、“The Snows of Kilimanjaro”と*The Old Man and the Sea*には読者に死を感じさせる不吉な生き物が共通して描かれる。さらにその描き込まれた生き物は主人公の内面を表していることに気付く。また、無意識の状態をイタリック体、現実をローマン体で描き分けている方法の効果について明らかにしていきたい。

“The Snows of Kilimanjaro”では豹、大きな鳥、ハイエナが登場する。冒頭では、豹の死体が描写される。

Close to the western summit there is the dried and frozen carcass of a leopard. No one has explained what the leopard was seeking at that altitude. (“TSK” 52)

作品の最後では、Harryは以下のように悟り、キリマンジャロの頂上に旅立つ。

...all he could see, as wide as all the world, great, high, and unbelievably white in the sun, was the square top of Kilimanjaro. And then he knew that there was where he was going. (“TSK” 76)

このように、“The Snows of Kilimanjaro”の冒頭と最後にともにキリマンジャロの頂上描かれ、冒頭では豹の死体、最後には死を自覚したHarryとHarryの遺体が描写される。Waldhornが「豹が汚れない死の状態死で死ぬ純粋な、頂上に雪を頂いた山」と述べるように、雪には純白や溶けて消えるはかないイメージがあるが、作品の題名につながる雪のイメージを重ねて、豹とHarryの死が位置づけられている（147）。

作品の冒頭部分で、簡易ベッドで横になっているHarryからは、気味の悪い大きな鳥が見え、不吉な描写がされる。

...there were three of the big birds squatted obscenely, while in the sky a dozen more sailed, making quick-moving shadows as they passed. (“TSK” 52)

Ernest Hemingwayの作品における無意識の描かれ方：「キリマンジャロの雪」と『老人と海』の場合

そして、以下のHarryのセリフからは、気味が悪い大きな鳥の描写に加えて、トラックの故障という不運やHarryが小説の題材として見ていたものが、皮肉にも怪我のために作品にできなくなったことが分かる。

“They’ve been there since the day the truck broke down,”.... “Today’s the first time any have lit on the ground. I watched the way they sailed very carefully at first in case I ever wanted to use them in a story. That’s funny now.” (“TSK” 52)

このように、気味が悪い大きな鳥は不運な場面において不幸を感じさせる生き物として登場する。さらに、HarryはHelenに、大きな鳥がまるで彼の死ぬ運命を知るかのように言い、大きな鳥の風貌や動作が詳しく描写される。

“...I’m dying now. Ask those bastards.” He looked over to where the huge, filthy birds sat, their naked heads sunk in the hunched feathers. A fourth planed down, to run quick-legged and then waddle slowly toward the others. (“TSK” 53)

Bloomは、「このハゲワシは、後に登場するハイエナのように、死を表し、Harryが回復することの不可能性を象徴する」とし、Hemingwayが作品に配置した生き物とHarryの状態の関連性を指摘している（“Plot Summary of ‘The Snows of Kilimanjaro’” 70）。

さらに、作品中には不吉な場面を創出するハイエナが存在を指摘できる。HarryとHelenがお酒を飲む場面で辺りがどんどん暗くなり狩猟ができないほどの闇の中、ハイエナが通り過ぎる場面がある。

While it grew dark they drank and just before it was dark and there was no longer enough light to shoot, a hyena crossed the open on his way around the hill.

“That bastard crosses there every night,” the man said.

“Every night for two weeks.”

“He’s the one makes the noise at night. I don’t mind it. They’re a filthy animal though.” (“TSK” 63)

HarryとHelenは気味悪く感じている。この場面では、Harryの脚の怪我の深刻さ、狩猟ができないほどの暗さ、ハイエナが出す鳴き声、Harryが脚に重傷を負ってからハイエナが二週間毎日やってくるといった不吉な気味の悪い条件が重なる。

一方、*The Old Man and the Sea*では、不吉な状況を補強する生き物として、マカジキが流す血、およびサメが登場する。マカジキの血はSantiagoが鉤をマカジキの横腹に刺したことによる傷である。その結果、マカジキの血が海に流れ出す。

...the sea was discolouring with the red of the blood from his heart. First it was dark as a shoal in the blue water that was more than a mile deep. Then it spread like a cloud. (TOMS 72)

そして皮肉にも血の匂いがサメを招いてしまう。

It was an hour before the first shark hit him. The shark was not an accident. He had come up from deep down in the water as the dark cloud of blood had settled and dispersed in the mile-deep sea. (TOMS 77)

サメの襲撃によって魚からまた血が流れ出し、また別のサメを呼び出すというさらなる悪循環を招き、水の中の匂いを消すすべはなく、マカジキは完全に食いちぎられて骨と化す。

But there was no way to keep its scent out of the water and the old man knew that a very bad time was coming. (TOMS 82)

次に、ライオンではなく猫が登場する場面に注目したい。Santiagoは完全に打ちのめされ、憔悴し切って倒れたり横たわったりしながら、やっとのことで小屋まで戻るが、その間、猫が通り過ぎるのを見る。

A cat passed on the far side going about its business and the old man watched it. (TOMS 94)

百獣の王としての理想のライオンを回想するのではなく、疲れ果てたSantiagoが見るのは矮小化された現実の猫である。*The Old Man and the Sea*における動物の描写にも無意識下における夢や回想に現れる理想としてのライオン、意識下における現実の猫という対比が見られる。Hemingwayの作品に登場する動物が果たす役割についての研究がなされている。今村楯夫は、猫は犬とは違い、何かを予兆するわけではなく、「老人の存在そのものを無視して通り過ぎて行くところに、さらに深い意味」をもつと考察し、「老人を非在化し、無化することにより、この厳粛な場面を不条理な世界に閉じこめ・・・崇高さと神聖さも否定してしまう」と作品における猫の役割を猫の生態の観点から分析している（『アメリカ文学と動物——犬と猫の話』22-23）。第二章では、Hemingwayの作品に見られる時系列や場所の移動から作品の空間的スケールの大きさを確認したが、今村はこの場面において「猫がここで「はるか前方」を横切るところに、「雨の中の猫」の雨がっぱの男や『武器よさらば』の犬が描く軌跡よりも、遥かに広く、遥かに遠い、空漠として空虚なる空間が眼前に広がっていることに気づく」と指摘する（『ヘミングウェイと猫と女たち』148）。サメにマカジキを食いちぎられ、疲弊して帰還したSantiagoの前に現れる弱小の現実の猫は、主人公の打ちのめされた現状と重なり合うだけではない。「かたや老人（キリスト的な人物）がマストを肩に倒れているのに対し、その老人の存在をもまったく意に介さないこの悠然たる猫は、老人の眼差しを拒絶し、異なった空間に生きる存在物」であり、「猫が一匹横切らなければ、あるいは猫が一本の軌跡をこの空間に描かなければ生まれえない空虚さ」が

Ernest Hemingwayの作品における無意識の描かれ方：「キリマンジャロの雪」と『老人と海』の場合
猫の登場によってもたらされたと論じている（今村、『ヘミングウェイと猫と女たち』149）。

さらに、Hemingwayが作品に描いた生き物が不吉な場面の創出だけでなく、主人公の感情を表している。Waldhornは、「普段よりも頻繁に使われるHemingwayの象徴もHarryの内面の葛藤を強調している。たとえば、豹が綺麗な死を迎える清くて雪を頂いた山と、Harryが腐敗して死ぬ暑い平地とで、象徴的な環境の対立が生じる」と指摘し、シンボルがHarryの内面を映し出していると考え（146-47）。豹とHarryの死には複数の対比が見られる。豹は、神の家と呼ばれる神聖な雪を頂いたキリマンジャロの頂上で、汚れない状態で腐敗せず、遺体が凍り付いたまま保存されている。それに対し、Harryは二週間前の掻き傷の消毒ができなかったために、右脚が壊疽を起こしている。また、Harryは肉体だけでなく、墮落し、精神も腐敗している。Harryは暑い平原で、腐敗した脚をさらしながら亡くなる。

The dressings had all come down and she [Helen] could not look at it. ("TSK" 77)

また、Harryは“as wide as all the world, great, high, and unbelievably white in the sun”と描写されるように神々しいキリマンジャロの四角い頂上を“he knew that there was where he was going.”と死の直前に目指す（“TSK” 76）。

不吉なイメージを与える動物のハイエナはHarryが死を意識したことに合わせて効果的に配置されている。Waldhornが「死の広がる雰囲気のためのメタファーとして、ハイエナも説得力がある、Harryの差し迫った死のHarryの最初の意識と正確に一致して入り込み、「突然の邪悪な臭いを放つ空虚」のへりを軽やかにかすめる」と指摘するように（147）、同じ場面でHarryの死の自覚とともにハイエナが描写されている。以下がその場面である。

...it occurred to him that he was going to die. It came with a rush; not as a rush of water nor of wind; but of a sudden evil-smelling emptiness and the odd thing was that the hyena slipped lightly along the edge of it. ("TSK" 64)

ハイエナはたき火の明るさの届かないところにいて、そのときHarryは再度死を感じる。この場面でも、ハイエナが存在とHarryの死の意識が同時に描かれる。そしてHarryが亡くなる場面では、ハイエナが奇妙な、人間のような、泣きわめくような声を出し、ハイエナが出す声があまりにも騒がしくなる。

次にHemingwayがイタリック体を使用して表記上その部分を区別していることに着目したい。MacDonaldは作品におけるイタリック体の意味を複数指摘していて、「どのように“The Snows of Kilimanjaro”におけるイタリック体の使用が失敗した作家としてのHarryというHemingwayの肖像を引き立たせる役目をするか」を分析し（83）、「イタリック体の使用の具体的な根拠は、ストーリーの分割に、より明確なほのめかしを持たせるということ」と考え、「イタリック体とローマン体が交替することによって、読者はHarryが作家としての義務を果たせなかったということに常に気付く」と述べているとおり、表記上の描き分けによって作品がより優れたものになっている（84）。

“The Snows of Kilimanjaro”においては、Harryの回想は過去のこととしてイタリック体で表記され、現実と分離される。イタリック体で表記されたHarryの記憶の一部はHarryが作品に書けなかった題材である。Harryは軍の撤退の後、トラキアを離れようとした自身の出来事を作品にしようと考えていたが、書けないでいる。MacDonaldは、「イタリック体の一節を構成するエピソードは、Harryが見た物の美しさと力を例証し、結果としてHarryが生み出したかもしれないフィクションの損失を強調する」と主張し、さらに「“The Snows of Kilimanjaro”のイタリック体とローマン体の分割はHarryの「現在の下劣な状況とより英雄的な過去の記憶」の間の意義ある対比につながる」と考察する（83-84）。MacDonaldは「“The Snows of Kilimanjaro”におけるイタリック体の使用のもうひとつのほめかしは、結局のところ、記憶をイタリック体にすることは単なるHarryの思慮の反映を超えているという事実を含んでいる」と考察するように、Harryの意識を超えた幻想がイタリック体で書かれた場面で出現する（84）。

一方、Harryの死の場面はローマン体で描写される。Bloomはその表記上の理由を「彼 [Harry] の以前の想像とは違って、これはイタリック体で区別されていなく、彼の現在の生活の一部である」からと分析する（“Plot Summary of ‘The Snows of Kilimanjaro’” 71）。また、Bloomは「しかし、最終的なビジョンをイタリック体ではなくローマン体で書きつけることによって、HemingwayはHarryがついに何かを創造した、つまり、彼は死の瞬間に自分の前世を強く否定したということを示しているのかもしれない」とHemingwayがローマン体で書き表した意義を考察する（“Plot Summary of ‘The Snows of Kilimanjaro’” 72）。

Hemingwayがイタリック体とローマン体を使い分けることで、読者は状況の変換に気付くことができる。「Harryがオーストリアのアルプスでのスキー休暇や戦争経験について思い出にふけると、ここでHemingwayはイタリック体に切り換える」というBloomの指摘のように、回想場面はイタリック体で表され、表記上現実とは区別されるが、回想の内容自体はHarryの過去の体験であり、フィクションや虚構ではない。Bloomは、「Hemingwayが、Harryが書くべきだったこと、彼の現在の静止、墮落と激しい対照をなしている美、活力、彼の人生の英雄的行為を示すのはこれらのイタリック体で表示した内面の独白の中である」と指摘する（“Plot Summary of ‘The Snows of Kilimanjaro’” 70）。

このようにHemingwayは二作品に共通して、不吉なイメージを与える動物を描き入れており、それらの動物が象徴するものは、主人公の状況や主人公の意識と重なり合い、一体化している。さらに“The Snows of Kilimanjaro”においては、無意識の状態をイタリック体、現実をローマン体で表記することにより、読者が状況の変換に気付けるという表記上の工夫だけでなく、イタリック体が作品に複数の意味をもたらしていると分かる。このように、不吉な場面を創出する生き物の配置、イタリック体とローマン体での表記上の描き分けというHemingwayが仕掛けた作品の構成上の工夫を見出せた。

Conclusion

“The Snows of Kilimanjaro”と*The Old Man and the Sea*は高い評価を受けてきたが、そうした評価を再確認するために、主人公の無意識の観点からの分析を試み、結果として、両作品に共通して描かれる無意識が、作品で重要な意義をもつことが明らかになった。

まず、主人公の夢や回想という無意識は、心理描写を複層的にしており、無意識的に発せられたセリフの中には、主人公が面と向かって口にはできない思いや切実な本心が露呈されており、死を意識した主人公の苦悩や葛藤が描き込まれている。次に、両作品におけるHemingwayの構成上・技巧上の成功例として、無意識の場面が、過去と現在、理想と現実の変換、場所の移動に効果的に登場し、これらが作品に空間的な広がりをもたらしていることが指摘される。無意識の場面が作品において、時間や場面の変換・時系列上と地理的な移動を可能にし、時空世界を創造している。またハンディキャップを負い、本来の力を発揮できず、死に直面する主人公が共通して描かれるが、回想という無意識の状態に現れる理想としての過去と、痛みを抱え、死に直面する現実の現在という構成上の対比が際立っている。このように無意識下の過去、意識下の現在が錯綜し、主人公の昏睡状態や疲労の深さを読み取れる。これらが自然にかつ効果的に入り混じり、Hemingwayの卓越した描写力が窺える。また、空想や回想という無意識の場面の中に過去の栄光が思い出され、回想の場面が主人公の英雄的側面を補強する意義もある。さらに、Hemingwayが両作品に配した不吉な場面を創出する生き物や、表記上の区別としてのイタリック体とローマン体での場面の描き分けについて考察すると、不吉な生き物が、主人公の内面と重なること、理想としての無意識の回想場面をイタリック体で、深刻な現実の現在をローマン体で描き分けることにより、現在の深刻さが際立つといったHemingwayの構成上の工夫が確認される。この表記上の描き分けにより、作家として成功できなかった主人公Harryと、形にできなかった作品の損失が浮き彫りになり、悲劇性が強められている。

Hemingwayの作品では場面や空間の自然な移行が特徴的に見られるが、今後さらに、Hemingwayの空間の描き方について解明していきたい。

Notes

¹ 本稿では“The Snows of Kilimanjaro”を“TSK”と省略する。

² 同様に*The Old Man and the Sea*をTOMSと省略する。

Works Cited

- Baker, Carlos. *Hemingway, the Writer as Artist*. 3rd ed. Princeton: Princeton UP, 1963. Print.
- Bloom, Harold, ed. *Bloom's Major Short Story Writers*. Broomall: Chelsea House Publishers, 1999. Print.
- . "List of Characters in 'The Snows of Kilimanjaro.'" Bloom 73.
- . "Plot Summary of 'The Snows of Kilimanjaro.'" Bloom 69-72.
- Burhans, Clinton S. Jr. "The Old Man and the Sea: Hemingway's Tragic Vision of Man." *Modern Critical Interpretations: Ernest Hemingway's The Old Man and the Sea*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999. 45-52. Print.
- Gurko, Leo. "The Heroic Impulse in *The Old Man and the Sea*." *Modern Critical Interpretations: Ernest Hemingway's The Old Man and the Sea*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999. 13-20. Print.
- Hemingway, Ernest. *The Old Man and the Sea*. 1952. London: Arrow Books, 2004. Print.
- . "The Snows of Kilimanjaro." *Ernest Hemingway: The Short Stories*. New York: Scribner, 2003. 52-77. Print.
- MacDonald, Scott. "Hemingway's 'The Snows of Kilimanjaro': Three Critical Problems." Bloom 83-85.
- Moddelmog, Debra A. "Re-Placing Africa in 'The Snows of Kilimanjaro': The Intersecting Economies of Capitalist-Imperialism and Hemingway Biography." *New Essays on Hemingway's Short Fiction*. Ed. Paul Smith. Cambridge: Cambridge UP, 1998. 111-36. Print.
- Waldhorn, Arthur. *A Reader's Guide to Ernest Hemingway*. New York: Syracuse UP, 2002. Print.
- Waldmeir, Joseph. "Confiteor Hominem: Ernest Hemingway's Religion of Man." *Modern Critical Interpretations: Ernest Hemingway's The Old Man and the Sea*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999. 27-33. Print.
- 今村楯夫「アメリカ文学と動物——犬と猫の話」『人間と動物をめぐるメタファー』（白百合女子大学言語・文学研究センター（編）．弘学社、2008年、pp.11－24）
- ．『ヘミングウェイと猫と女たち』（新潮社、1990年）